第二節　沖縄の葬送儀礼

名嘉真宜勝

一、生と死の境界

沖縄の葬制が本土他府県と大きく違う点は、単葬でなくて複葬、すなわち洗骨習俗などを伴う二次的な処置がとられている点である。またそれに伴って、墓制からみても、風葬を長い間行なってきた。現在では火葬が普及しつつあるが、まだ沖縄本島の周辺離島の大部分では依然として風葬を行なっている。大まかにいうと、そういう点が違う。この複葬、そして風葬という葬制の中身がどういうふうになっているか、その事例をおもな箇所について具体的に指摘してみたい。

1　死を予兆するもの——動物・夢・現象

まず、死を前もって知る、つまり予兆についてである。死の予兆はムヌシラシ（物知らせ）と称し、大きく三つに分けることができる。

一つは動物によるムヌシラシ。そのなかで代表的なものは犬（イン）と猫（マヤー）である。インとマヤーは対語で

甲第37号証

よく用いるが、犬のほうは沖縄では昔からたいへん注意深く観察されていたとみえ、たとえば、犬のタチナチというのは、獅子が不動の姿勢で尻尾を地面につけて、前足を顎のほうにつけてにらんでいるような形で鳴くさまという。そして狼の遠吠えと同じようにウォーと鳴く。魔物を見て、葬式などのさまを見て鳴いているといわれている。そういうことがあると間違いなく近いうちに、部落うちから必ず死者がでるとされ、信用度の高い死の予兆と考えられている。また、猫の異様な鳴き方、これをオーナチといい、マヤーがオーナチすると死者がでるという。オーというのは「あの世界」のことである。これがあると間違いなく死者がでる。つまり沖縄全体で犬、猫のこうした現象がたいへん広く信じられている。

また、ちょうど日が落ちて夜でも昼でもない時刻――沖縄ではアコートゥトゥマという――いわゆるたそがれどきに、とくに夜烏（ユーガラシ）が一羽だけ、しかも一声だけ悲しく鳴いて飛んでいくと、これも間違いなく死者がでるといわれている。それともう一つ、鳥類のなかで死を予兆するものとしてクカル、学術名で琉球赤ショウビンという鳥がいる。この鳥は、山奥に棲息しており、そう大きくはないが、嘴が赤く、体全体も赤い鳥である。この鳥が屋敷内に飛び込んできたら死者がでるといって、たいへん恐れられている。

次に夢によるムヌシラシがある。とくに歯の抜ける夢は死につながるといって嫌われている。この場合にもいろいろあって、奥歯で血が伴う夢は肉親か家族に死者がでるといって、とくに恐れられている。そのほかにも死を引き起こすものとして嫌われている夢は多い。

三番めは、いろんな現象によるムヌシラシ。なかでもタマガイ、これは火の玉である。一名ヒーダマともいわれている。ちょうど頭くらいの大きさの火の玉が夕方、人家の上に現れる。そのタマガイが上がると間違いなく死者がでる。これも一〇〇パーセント近く信用されている。

また、音によるムヌシラシも多い。現在でも信じられているチグトゥという音による死の予兆は、「チグトゥがあると死者がでる」というふうに表現され、どういう物音かというと、棺箱をつくる音につながるもの、たとえば金づちで釘を打つ音、あるいは鋸で板を製材する音、あるいは葬式のときの臼をきねでつく（精米）音などである。これらをチグトゥといい、それが死の前になると聞こえるとされている。これは一人だけではなく数名でも聞くことができ、その音は、だいたい大きな物音で一回限りで消える。数回聞こうとしても聞けないという。

以上のいくつかの例のように、われわれの先輩たちは死を予め知ることができた。しかし現在は電気もつき、火の玉とか物音も騒音のほうが激しくて聞き取りにくくなって、迷信的なものとして処理されつつある。昔の人々はそれだけ自然に対する感覚が敏感だった、といえようか。

2　「死」を意味する言葉

「死」の呼称は多い。マーチャンという言葉が日常よく使われている。その他、ミーウティーシャン、シジャン、ウシジリン、デージナタン、ナーナタン、ウーランナタン、グソーカインジャン、ヒャクサチキミソーチャン、チョーミー、ユーシリタン、ムルタン、ヒンギタン、マキタン、カンナリオーリ、スノーリィ、トータビ、スーカーワタイなどの言葉がある。これらの言葉について少し説明してみよう。

沖縄方言のマースンとかマーチャン、マーセという言葉は、「何か物を回しなさい、たらい回しに回す」という意味である。おそらくこの言葉には、現世の人は真っすぐ前に向かって進んでいるけれども、死んだ人は回れ右をして後ろに進んでいった、後生の世界が後方にあるという考え方が含まれていると思われる。

それからミーウティーは、目をつぶった状態を表す言葉である。死んだ人は目を閉じてまばたきもしないから、こ

れはたいへん妥当な表現である。それとシジャン。これは「死んだ」という共通語からそのままなまったものかどうか。これは全沖縄の古老が現在でも知っている生きた言葉である。共通語が普及する以前からあった言葉だから、やはり古い沖縄の方言だと考えられる。スジャという人間もしくは神の意味に解釈されている古い言葉があるが、沖縄の古い時代には、死ぬことは神になるというふうな考え方があったので、このシジャンも、神になったというような意味ではないかと考えられる。しかし単純な意味で「死んだ」という共通語からの展開である可能性もあるし、筆者としてははっきりとした結論は出せない。

次にウシジリンは「押し切れた」、息がことごとく切れたという意味。デージナタンは「たいへんになった」、これも一つの忌み言葉である。ナーナタンは「すべて終わった」「すべて完了した」「息を引き取った」というような意味。ウーランナタンは「いなくなった」、死者をこの世から墓に隔離したので、いなくなった。それからグソーカインジャン、これは仏教でいう後生で、「後生の世界に行った」という意味で今でもよく使われている。それからヒャクサチキミソーチャン「百歳になられた」。昔は百歳まで生きれば神だというような考え方があって、結果は長命だった。それからチョーミーも同様に、「長命であられた」という意味である。

次のユーシリタン、これはたいへん古い言葉で、死の呼称としては大事な言葉である。つまり、これは普通の人々が亡くなったときには用いず、古老が亡くなったときだけに使う。したがって若者が亡くなったときに、誰それはユーシリミソーチャンといったら笑われてしまう。六〇、七〇歳のおじいさん、おばあさんが亡くなったときにはじめて使われるのである。シリンというのは脱皮することをいう。ハブが脱皮したり、蟬が脱皮したり、あるいはヒナが卵からかえることもシリンという。ユーというのは「世の中」である。合わせて、この世を脱皮したという意味で、新しい生命体になられたというような意味になる。結局は神になられたという考え方につながる。

それからムルタンというのは「お戻りになった」。これはもとの神に戻ったとか、生まれ変わったという意味。それからヒンギタンというのは「逃げた」という意味で幼児に用いる。子供はやんちゃでまた戻ってくる。六歳までは神のうちで、また生まれ変わるという思想が沖縄でもある。マキタンは病気に「負けた」というような意味である。

それから宮古の言葉で、あるいは八重山でも聞かれるが、カンナリオーリとは「神になられた」という意味。カンというのは神で、ナリオーリというのは「なられた」という意味。これなどは、南島における死霊観を的確に表現した言葉として重要である。今日でも宮古ではこの言葉は一般的によく用いられている。八重山でも古老の間ではこの言葉はまだ使われている。死んだことを、神になられましたというふうに表現しているわけである。

それからスノーリィは先島で使われているが、意味のよくわからない言葉の一つである。それからトータビというのは中国の「唐」に関連している。明・清の時代まで沖縄人は貿易でいろいろ旅をしていたが、現代の旅とは違い、結局は死を決して行なわれ帰らない人がほとんどであった。そこで唐の旅に行ったことは死にに行ったことに等しいという意味で、「トータビに行った」というふうに死を表現する。スーカーワタイというのは、旅先で亡くなった場合をいい、自分の村うちでなくて、海を越えて旅先で死んだという表現になる。

以上のように、沖縄では死を意味するさまざまな忌み言葉がある、こういう死の呼称からも、二、三指摘したように、沖縄の人々の死に対する考え方が若干わかる。またこれらの言葉は、都市によって地方によって少しずつ変化し、言語学的にはたいへんおもしろい呼び方もある。

3　魂を呼び戻す呪術儀礼

臨終に立ち会うのはやはり身近な人々である。家族、兄弟、ときに友人、それから隣近所の人も立ち会うが、それ

らの人々は最後まで死の儀礼に参加しなければならない。後述するマブイワカシの儀礼などにも参加しなければならず、忌みをかぶる人々になる。そういう人々を俗にユニクマイン（種子が発芽しない状態をいう）といい、儀礼を全うすることを覚悟して臨終に立ち会う。

一方、親族、身内でも、臨終に立ち会ってはいけない人々がいる。まず妊婦。腹の中の赤子のために立ち会ってはいけない。魂が奪われやすい、つまり死の場に臨むと、いっしょに持ち去られていくという考え方があるからである。また、その日が生まれ年に当たっている人も立ち会ってはいけない。それから死者と同じ干支、午年の死者だと午年の人も立ち会ってはいけない。さらに、死ぬか生きるかの瀬戸際にある病気の人も同様に立ち会ってはいけない。そういう人の周りには魔物がうようよしているため、魂を奪われやすいと考えられているからである。傷やおできのある人もやはり、傷が悪化するというわけで立ち会わない。それから家を新築中の戸主の場合も、死の穢れが及んで、その家が栄えなくなるという。あまりみられないが、家畜のお産がある場合に立ち会わない地方もある。また、神司、神に仕えるシャーマンも遠慮する地方がある。以上のように、臨終には家族、親戚が立ち会うが、例外も多い。

次は死の確認方法であるが、現在はいうまでもなく医者の診断を待たなければいけない。しかし今でも無医村があるくらいだから、つい最近まで村の伝統的な死の確認方法が残っていた。なかでも伝統的なのは、脈をとるやり方である。死に際になると脈搏がどんどん腕のほうに上がっていき、その後弱くなるとだめだとみなされる。大きなため息をつくとか、涙を落とすとか、いろいろな現象をみて確認することもあった。息を引き取るときに、なかなか死に切れず苦しむ場合、包丁を胸の上に置いておくと息を引き取りやすいという地方もある。それから、八重山の川平で海の遭難事故があって、溺れた人に仲間が人工呼吸を施していた現場に筆者も立ち会ったことがあるが、そのときに聞いた話では、溺死の場合の死の確認方法は尻の穴の具合で行なわれ、開いているとだめだということだった。

それから臨終の際の魂呼びというのがある。つまり臨終にあたって、その人から遊離した魂を呼び戻そうという呪術儀礼のことである。他府県の資料を見ると、魂呼びの儀礼が死の葬送儀礼のなかで出てくる地域があるので、沖縄でもないかどうか、調査のたびに注意しているが、たとえば屋根に上がって魂を呼び寄せるような、そういう儀礼はなかなかない。しかし、それに少し近いものはある。

その事例を少しあげてみる。筆者が直接調査したのは竹富島の事例である。『沖縄民俗』一〇号にもでてくる例であるが、干潮時に死んだ場合は、魂はまだ完全に遠くへ行ってないという考え方から、まだ死んでいないといってあきらめない。満潮時にならないかぎりは死んでいない。だから、満潮時になっても息をふきかえさないことがわかってはじめてワアワア泣いて死の手続きをする。その他、死者の名前を呼ぶ事例が若干ある、魂呼びとして考えられる儀礼はさほどない。

つまり沖縄では、死が確認されたあとの魂呼びの儀礼よりはむしろ、死ぬ前にたいへん気を遣っているのである。たとえば転んだり、痩せたり、病気になったりすると、魂が抜けた現象であるという。これはマブイヌギといわれる。そのため沖縄では、「魂を込める」というマブイグミの儀礼がたいへん重要視されている。マブイグミはマブイゴメがなまった言い方で、筆者もこの儀礼は何度もされたくらいである。今でも、まだ廃れていない。日常生活を営むなかで魂が抜けていく状況がわりあい多いので、それをそのまま放っておいてはいけない、放っておくと死につながるというわけである。だから死なないように、日常から気をつけて魂を呼び寄せなくてはならないのである。

死が確認されると、村中にその死を知らせなければならない。沖縄の場合、村が隣り合っていて、散村的なところはめったにないので、死者がでるとすぐ村中に知れわたる。死者がでるとワアワア泣くので、その大きな泣き声で隣近所が死を知り、次から次へと伝わるというのが一般的だ。しかし、きちんと知らせる方法もある。

たとえば、部落の区長に知らせると、区長は法螺貝で知らせる。その吹き方も、祭のときと死者がでたときの吹き方は違う。久高島では男の子が知らせ人となって、道の重要な箇所、十字路を誰々が亡くなったといって告げて歩く。一般的には法螺貝で知らせる地域が多い。筆者の住んでいる読谷村の波平という約五〇〇戸くらいの村では、要所要所にスピーカーが設置されていて、朝早く、みんなが仕事に出ないうちに、おごそかな声で「どこどこのじいさんが亡くなりました。生前ご交誼のあったみなさんに謹んでお知らせします」という形でスピーカーで二回ほど流される。また、道の重要な箇所に貼り紙をして知らせている村もある。スピーカーや貼り紙を使うのは、現在はいろんな騒音があって泣き声だけでは隣近所に聞こえないからである。

二、死者の葬送儀礼

1　湯灌に用いる産湯の水

死者は沐浴、湯灌をさせて清めねばならない。この儀式に関する呼称はそれほど多くはない。アミチュージ（浴み清め）というのが一般的で、アミチュージがなまってアミソージといったり、単にユーアミという場合もある。湯灌は必ず行なわなければいけない儀式であるが、その際、水が重要な問題となる。この水は、生まれたときに使った泉の水でなければいけないというのが原則であるが、今では水道の普及で原則は崩れ去りつつある。しかし古くは必ず産井戸の水を使った。その井戸は村で最も古いといってもいいくらいの重要な井戸で、そこから水を汲んでくるのである。村によっては、産湯の水と死に水を使う井戸が別々になっている場合もある。読谷村でも、北谷町でも別々になっていて、こういう地域が若干ある。

井戸からの水の汲み方にもたいへん神経がくばられる。古い風習かどうか知らないが、水を汲みにいった者を迎える風習をもつ地域がある。この風習は慶良間諸島の渡嘉敷島にある。阿波連の村では、死に水を所定の井戸に汲みに行った者を、水汲みから帰ってくる時間を見計らって、迎えに行くのである。つまり迎え水の風習がある。この場合は、この水は神の水だという意識につながるわけである。一方、若干古いならわしを残している地域では、いったん門口でおろして、家の中から声をかけて、はじめて家の中に水を入れるという風習が残っている。また、こうした信仰が薄らいだ地域でも日常の生活のなかで行なわれている水汲みの際に、水汲みに行った者を迎えに行くことは死につながるといって、どんなに遅くてもいいから迎えに行くものじゃないといわれている。それから水の汲み方にしても、逆さに汲むとかいろいろな儀礼がある。

次に、湯灌に使う水はシチミジ（敷水）、あるいはサカミジ（逆水）といって、冷たい水にお湯を注いでつくる。このやり方は今でも多い。ところが出産儀礼のときは、赤ちゃんに浴びさせる水はその逆でなければいけない。つまり生きている者の場合はお湯に冷水を注いでつくり、死者の場合はその逆にする。これは現在でも強く守られている。

こうして水で死者に沐浴させるわけであるが、その場合、浴びせる人はおもに娘である。そして、死体にさわることが親孝行をしているということにもなる。知念、玉城という村は俗にオリエントといわれるくらい文化の古い地域だといわれ、神の国だともいわれており、聖地信仰の中心をなしているところである。東御廻りの聖地の集中した地域である。その知念、玉城両村で筆者が採集したところでは、死者を浴びせるときに、必ず手に白いタオルを巻くという信仰がある。筆者の住んでいる読谷村とかほかの地域でもタオルを用いるが、それでも素手で死体に触れてもかまわない。ところが両村では、もし素手で死体に触れるとヒジュルジーといって、冷たい毒気にあって、触れた人はたちまちハブに嚙まれたようにどす黒くなって死ぬと考えられている。

しかし、沖縄では死んだ人はただちに神になるという考え方に照らし合わせてみると、この知念、玉城の習慣は、かえって古い形を残しているのではないかと思われる。沖縄では、たとえばちり紙が入る以前は、便所の紙でもユーナという木の葉っぱを使ったり、あるいは藁をなって綱にして便所に下げておいて使うとか、あるいは竹ぐしでやるとか、紙以前はそういう原始的なものだった。要するに手は汚い。それからイモ掘りをすれば手を黒くする。あるいは肥やしも、山羊の堆肥は手でつかんで入れるから、日常、農夫の手はたいへん黒っぽく、健康的だけれども荒れている。要するに神の世界から見れば手は穢れている。そういう手で神様である死体にさわることは畏れ多い。だから神聖な白いサージで触れなければいけないという考え方だったのだろうと思う。ちょうど医者が患者に接するときにマスクをしたり、手袋をしたり、看護婦が白衣をつけたりすることといっしょだと考えてもよい。湯灌については、現在でもそういう信仰が根強く残っているわけである。

2　死出の旅仕度

死者に着せる衣装、死装束の枚数は奇数枚でなければならない。三枚、五枚、七枚、九枚という奇数で、一枚というのはまずない。三枚もほとんどなくて、いちばん多いのは五枚と七枚。年寄りや寒がりの人とか、そういう死者には、九枚や一一枚という場合もある。こういう死装束をグソージン（後生衣）と称する。死装束の色は、白いものがほとんどである。この衣装の名前もいろいろあって、たとえばトゥビイショウ。天に飛んでいく羽衣の意である。また、カンバニギン（神の衣）とか、白いのでシルチョウとかとも称される。白い衣装というのはたいへん重要な死装束の一つで、しかも、その縫い方にもいろいろな禁忌がある。

針を襟元に刺す習慣がある。七本の対で計一四本の縫い針を刺す。そして糸を五センチほどつける。それも白い糸

と黒い糸を使い分けたり、使い分けなかったり、地域によっていろいろある。あの世＝グショー（後生）の世界は水が乏しく、水に苦労する。あの世でこの針と水を交換して買って飲むためにつけるのだと、ほとんどの地域で考えられている。

さて、湯灌をし、死装束を着けた死者はどういう位置に寝かせるか。以前は沖縄の家の間取りは単純なものが多く、一番座と二番座、そして裏座から構成されていた。一番座には床があり、二番座には仏壇がある。つまり南に向かって右手が一番座、次が二番座、そして左の最後が台所、シムとかトゥングヮとか呼ばれている。

病人は普通、裏座で寝かされる。死ぬと早速沐浴させられて二番座、仏壇のある部屋に寝かされる。そして枕はイリ（西）に向けられる。沖縄方言で東西南北は、東はアガリ、西はイリ、南はフェ、北はニシという。音だけで考えると、ニシマックヮー（北枕）とイリマックヮー（西枕）を間違うことがあるので、注意しなければならない。イリマックヮーで西方に向けて寝かせるのが一般的だが、なかには南枕の地域もある。たとえば八重山とか沖縄の南部である。北枕も若干ある。東枕はほとんどみられないが、死者儀礼の一つとして東に向かわせることが少しはある。おもに西と南である。太陽の沈む方向に帰るとか、たまたま大昔、西枕にしたら生きかえった例があったのでそうするんだとか、いろいろ理由づけがある。

こうして仏壇の前で西枕に寝かされた死者には、いろいろな物が供えられる。これも供え物が多い地域と質素な地域がある。たとえば浦添市の例を一つ二つ紹介すると、首里に近い沢岻という部落の事例だと、四つの供え物がある。一つは枕飯――枕元に供える飯、盛り飯である。それにお箸を十字形に、あるいは真っすぐに立てる。これをカタチヌメーとか、チチャーシウブンと呼んでいる。二つめは汁。三番めは、味つけをしてない白い豆腐と豚肉とを一皿に盛ったもの。それから四番めが、小麦を水で少し練って十字形につくり、一皿に入れたもの。これはたいへん珍しい。

この四種類を沢岻部落では供えている。

同じ浦添市でも、前田部落という沢岻にやや近い部落ではまた違う。盛り飯、チチャーシウブンは同じ。それから肉。これはシルベーシといって、一般によく使われている供え物の名称である。豆腐と豚肉、天ぷらを一皿に盛ったもの。それから三つめの供え物が味噌を皿に入れたもの。沖縄では普通、味噌と塩は一皿に入れてはいけないといわれているが、それはこうした葬式儀礼からきているわけである。

地域によって事例はいろいろ異なるが、盛り飯（枕飯）は必ずつく。盛り飯は「死を予兆するもの」で前述したが、つき臼で精米してつくる。沖縄では餅つきの風習はないが、臼はある。それは精米のための臼で、これは枕飯をつくるための重要な道具である。

少し余談になるが、ご飯とともに供えられる豚肉にまつわる伝説がある。かつて沖縄では死者を食べる風習があった。これは食事のためか儀礼のためか知らないが食べていた。しかしいつからか、死者の代わりに豚肉を食べるようになったと説明してくれる古老がいる。もう一つ、葬式に行くことを、半分冗談めかせて話者が語ってくれる言葉に、フニカミーガイチュン（骨を嚙みに行く、誰それを食べに行く）というのがある。たとえば、おばあさんが亡くなって、ばあさんの肉を食べに行くというふうに表現する。しかし、これは話者自身が半信半疑で、昔はこういうふうにやったらしいと語ってくれる類のものである。こういう風習の名残なのか、親族関係をあらわす言葉に、たいへん近い親戚をマーシシーエーカ（赤肉を食べる親類、それから白い肉を食べる親戚）、ブトゥエーカ（少し遠い親戚）という言葉が沖縄の地域ではまだ採集できる。これも今後研究すべき課題で、食人の風習が儀礼としてあったのかどうか、そういう問題が残されている。

それから死者にはいろんな品物、副葬品を持たせる。これは死んだのちもグショーの世界で現世と同じような日常

生活を営むからだと考えられている。たとえば死者が波平部落の出身ならば、あの世でも波平部落の者はかたまって生活すると考えられている。だから隣近所の人が死ぬと、死者に対して、われわれの死んだ祖先にお土産を持っていってくださいと頼む。土産はおもに日用品で、たとえば酒とか、たばこ、お茶、針、下駄、草履、かんざし、たばこ入れ、櫛など。子供であれば、お菓子、おもちゃなどを供える。現世と同じような生活を営むと考えている証拠に、八重山では畑を分け与えるという風習がある。死者の分の畑として墓庭に、あるいは墓の近くの一画を少し耕して種も蒔いてあげる。しかもその種は生えないように煎るのである。とにかく死者の畑をつくる儀礼がある。あの世でも同じように農業を営むんだという考え方からである。

3　通夜から野辺送りまで

通夜の習慣は、もともとは、当日おそく死んで、どうしてもその日に葬式できない場合に行なわれた。だいたい一二時ごろまでに亡くなったのならば、その日に急いで葬式を行なう。一二時過ぎ、二時、三時ごろの場合は、坊さんとか念仏者、その他諸準備が間に合わず、その日に葬式ができないので翌日に延ばす。そのときに通夜をする。しかし昔は、貧しい家では通夜を行なうことは経済的な負担がかかったので、夜半でも葬式をやったという。

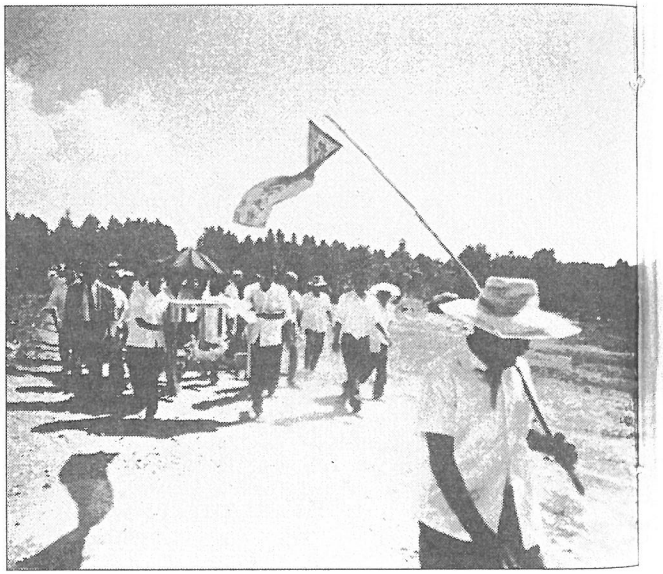
沖縄では通夜の場合、蚊帳あるいは幕を吊る。昼間でもそうである。ダビガチャ、葬式幕とかいろいろな呼び方があるが、読谷村では現在でも使用していて、これは部落所有が普通である。黒幕などで死者を囲むように吊る。八重山ではマクノウチとか呼ばれているが、女性たちは中に入って死者をとり囲んで焼香する。蚊帳を吊る場合には、地域によっては裾一五センチぐらいのところで切って、そこから魂が出入りできるようにする。それに三隅しか吊らない。一隅は必ずはずしておく。

蚊帳などを吊る風習の理由の一つとして、猫との関連があげられる。猫が死体の上を飛び越えると、死体が腐敗しないといわれているからだ。ミイラ状になってだめだという。だから猫を厳重に遮断するために吊るのだという。死体が腐敗しないということは大きな問題で、このことは後述するが、もし腐敗しないままで洗骨のときを迎えた場合、その家族および親戚は他の人に顔向けができないのである。彼らはたいへん肩身の狭い思いをする。腐敗しないということは生前、その人および一族が悪いことをした祟りだといわれるからである。りっぱに白骨化した死体は、その人が生前いいことをしたからで、神として昇天した証だという。白骨化していることを強く望むわけである。付け足しになるが、沖縄では、死んだ猫は木に吊るして風葬にする。筆者は中国で全く同じものをみたことがある。犬とか馬とかは土葬だが、猫は風葬なのである。

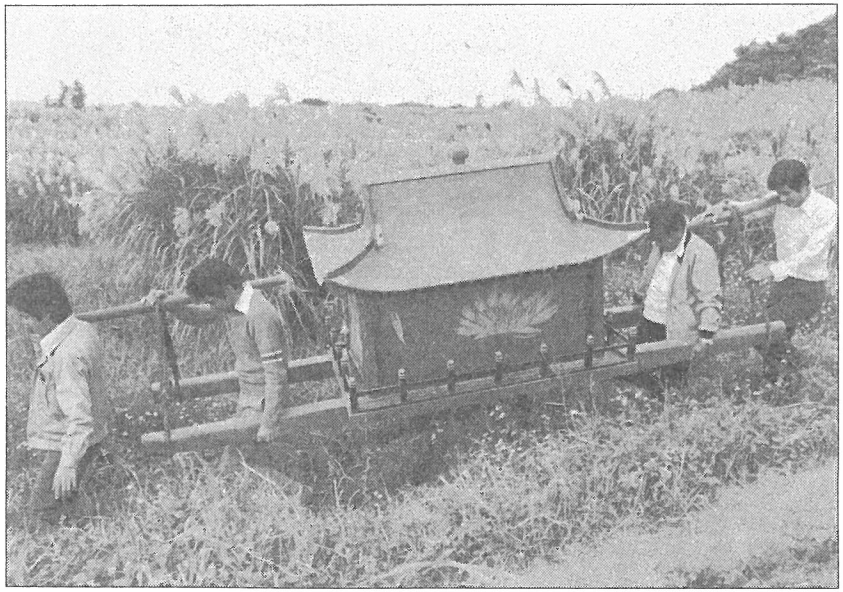
このように、喪家は多くの儀式をとり行なわねばならないためたいへんであるが、沖縄では、葬式の一切を助けてくれる葬式組が発達している。現在でもだいたい二〇戸前後が中心になって、葬式組みが出来上がっている。この葬式組をリンスなどという呼び方をする。読谷村の座喜味部落でもリンスという人々が積極的にいろいろな作業に加勢をしている。このような相互扶助のなかにあらわれる労働力の提供や物質的な援助もまた見逃せない。現在では香典料という形で金銭で処理しつつあるが、読谷村ではまだ米などを持ち寄る風習がある。今でも死者がでると米を一合ずつ集める。これはユーワーヌチュンという表現をする。ユーワーというのはお粥の意味のようであるが、それをつくる米として徴収する。これはまた死の通知とも関連して朝早くに、葬式組の係の人によって行なわれる。香典料の歴史は、沖縄の葬制の歴史の上ではかなり新しく、もともとは物の提供だったのである。

次は焼香の問題について述べる。これはダビ（茶毘）に来るとか、スーコー（焼香）に来るとか称している。このとき女性は、死体が横たわっている枕元の二番座に来て手を合わせ、男性は一番座に座わる。だいたい女性は門口の

四流旗



野辺送り（宮古・多良間島、大山春卒氏提供）



龕（読谷村渡慶次）

ほうから泣きながら入って来る。これをムヌイーナチと称する。それも普通の泣き方と違う。つまり「あなたは今まであんなに元気であったのに、どうしてこんなふうに目をつぶられたのか、ああ、私はどうしたらいいだろう」と、こんな感じの悔やみの言葉で、抑揚のある泣き方をする。これはまだ多くの人が現在も伝承している泣き方である。若い人はもう知らないが、古老はほとんど経験している。こういう泣き方ができないのはだめだったわけである。

葬具のことを少しみてみる。葬具の代表的なものとして、死者を運ぶガン（龕）と呼ばれる輿がある。これは別名コーとも称する。あるいは幼児語としてはアカンマー（赤い馬）とも称する。朱塗りなのでそう呼ばれている。このガンの歴史もかなり古いようである。渡名喜島ではガンといわずにヤギョーと呼んでいる。奄美までそういう死者を運ぶ輿が分布していて、渡名喜島以外にもヤギョーという地域はある。もともとヤギョーというのは担架状のもので、山の青い木を二本切って渡し、その上に簡単な木組みを乗せ紙を貼りあわして、棺箱を入れる覆いをつくっただけのものである。ガンの古い形式ではないかと考えられる。

それから天蓋（ティンゲー）といって、竜頭をかたどったものを棹の先につけて葬列の先頭を行く地方もある。また、四つの白い旗からなった四流旗と称するものもある。死者を納めるのはクワンチェーバクと称する。沖縄の場合、棺桶ではなくて棺箱で、その中に少し膝頭を立てて納める。それから白位牌を二基つくって一基は墓に持って行き、一基は四十九日まで仏前に飾っておく。簡単な野位牌である。その他にもいろいろな葬具がある。

葬具をとりそろえ、いよいよ野辺送りとなるわけである。野辺送りは、いちおう引き潮に合わせてやるのが普通である。死の現象は、潮が引いていくようにあの世に行くものだという考え方から出ている。ただし、準備の都合でたまたま引き潮に間に合わない場合もあるが、時間的にいうとだいたい四時、五時ごろ、引き潮のときを待って野辺送りを行なう。

野辺送りを行なう際、家からの出方、あるいは納棺の仕方にもさまざまな禁忌がある。庭にガンが待機していて、それに納めるわけだが、遺骸を棺に入れて、それから棺を出す場合に、一番座から出すところもあれば、二番座から出すところもある。特殊な死に方をした場合は、垣根をこわして裏から出すというやり方もある。普通は正門から出す。この野辺送りの行列の順序は地域によってさまざまである。たとえば松明が先頭にいく形と、旗などが先頭にくる形などがある。いずれにしろ松明を持つというのは、死の穢れを祓うことと関連があると考えられている。浦添市の仲間部落の事例をあげると、まず先頭に松明持ちがきて、二番めに旗持ち、三番めに槍持ちと、長刀の形をしたものを持つ者、四番めに竜の形をした天蓋持ち、五番めに遺骸の入ったガンを持つ四人、それから六番めに白位牌を持つ者（これは長男が持つ）、七番めに一般の会葬者の男、それから女というふうに続いて行列をなしている。だいたいこういう順序に並んで墓まで野辺送りをする。

三、沖縄の死霊観

1　死霊から祖先神へ

墓まで行く途中にシマミシー（島見せ）という儀礼がある。シマというのは村のことである。われわれのシマはどこだ、われわれの村はどこだとかいうふうに、今でも頻繁に使われる言葉である。そのシマをみせる儀式である。村をみせるという意味は、死者と村を離別させることである。実際に遺骸の入っているガンを村の方向に向けて眺めさせるという儀礼で、ちょうど村と墓地との中間の地域、いわば村の家々がやがてみえなくなるという境目で、別れの酒を供えて行なう。そこはシマミシードゥクマ（島見せ所）というふうな名称で定着している。読谷村には島見原（しまみしばる）と

いう地名があるくらいだ。墓地と村との中間の地域でそういう儀礼をして墓まで行くのである。

墓に着いたら、墓の土地の神にいろいろ供え物をして祈願をする。墓に向かって右側をヒザイヌカミ（左の神）と称していて、そこには土地の神がいる。次に墓口で祖先に「こういう理由で誰々をここにお伴しましたから入れてください」というような意味のことを申し述べる。そして墓口を開けて入るが、洗骨の問題があって、すでに前もって開けられている。墓口を開ける人は死者が子年であれば、子・丑・寅・卯・辰はカイクミと称され携わることができず、巳・午・未・申・酉・戌・亥はウチハナと称され、墓口の開閉に携わってよい。実際は墓口は大きい石なので、びくともしない。それで三回たたいて開けるしぐさだけをする。たたいたら、あとは誰が開けてもかまわない。

こうして墓口を開けて中に入る。墓口の大きさもだいたい近世になると決まってきて、多くの人が入ることはできない。二人が棺箱を持って入る。棺箱を置くところは土間になっていて、そこはシルヒラシドゥクマという、遺骸を乾かすという意味の場所である。だいたい頭が西側になるように棺箱を置く。地形によって墓はいろいろ向きがあるので、必ずしもそうはいかないが、だいたい西側になるように墓口に平行に横たえる。そしてすぐ後ずさりして出る。ススキを結わえた形をサンというが、このサンでパッと祓い清め、墓口を閉めて、また焼香をして祈願して引き上げる。

2　悪霊を祓い清める

墓から引き上げる途中、川とか海に下りて手足を洗い清める儀礼がある。この儀礼が現在行なわれなくなった地域では、塩水を自分の家の門口に用意しておいて、それを少しふりかけて入る。あるいは豚小屋があった時代――今は豚小屋も集団化してほとんど屋敷内にはない――には、豚小屋に行って豚をなかせてから家の中に入るというふうな習慣

があった。

死者がでると、各家々では木灰をまく。これは魔物の侵入を防ぐためである。もしくは竹棹あるいは庭ぼうきを横たえて魔物が入ってこないようにする。そしてある地方では、死者がでた家では、左縄を屋敷中張りめぐらしたり、魚をとる網を張りめぐらすという風習もある。

葬式がすんだその夜、ムヌウーイという魔物追いの儀礼がある。地域によっては用いる道具の中にボーミチャーというのがある。これは、竹に木札を吊るしてブンブン鳴るようにした簡単な道具である。筆者もおもちゃにしたおぼえがあるが、薄い板を糸にむすんでブンブン鳴らす。これで魔物を追い払う。これに携わる人はガンをかついだ四人の青年である。

喪家を祓い清める儀礼として、座敷をくまなく祓い清める。用いるのはまず塩水、砂利（珊瑚礁の小さいのを浜辺から拾ってきたもの）、棒切れなどを用いて家の壁をたたく。塩水をまきながら、砂利あるいは豆をまきながら、「アネアネ」「クマクマ」「ホーホー」といって、棒切れで壁をたたいて魔物を追い払うのである。そうして村はずれまで三名もしくは四名の者が魔物を追っていく。その際、松明とか、あるいは棺箱をつくった鋸の屑を用意しておいて、それらのものを村はずれに捨ててくる。また、村はずれに向かうとき、玄関先に臼とまな板、それから包丁が用意されていて、それを蹴飛ばしていく儀礼がある。臼とかはたいへん神聖な重要な道具として魔物がついていると困るわけで、全部祓い清めるわけである。このような儀礼がつい最近まであったが、今はもう廃れている。

3　死者との惜別の宴

翌日の墓参りから七日間、毎朝墓参りがある。地方によっては四十九日まで毎日行くところもある。たいていは翌

日から七日間の地方が多い。とくに翌日はナーチャミーといって、重要な墓参りの儀式である。ナーチャというのは「翌日」、ミーというのは「見る」という意味で、これはできるだけ朝早くいくものだといわれている。その昔、死者が蘇生した事実があったから、早く行って、もし蘇生しておれば助け出さねばならないということからきている。家族の方が水と花と酒ぐらいを持って行くので、別名ミジマチー（水祭り）、あるいはチャマチー（茶祭り）とも呼ばれている。とにかく早く行くものとされている。そして一週間墓参りをする。その後は家において七日ごとの焼香をする。ハチナンカ（初七日）からフタナンカ（十四日）、ミナンカ（二十一日）からシンジュウクニチ（四十九日）まで七回のナンカ祭の儀礼がある。

戦前まで残っていた古い習俗に、死者との別れ遊びがあった。これは那覇市、浦添市、宜野湾市、北谷町、読谷村、、石川市、渡名喜島などで行なわれていた。とくに一七、八歳から三〇歳前後の若者が死んだ場合、その仲間が死者を慰めるために墓に行って死者とともに遊ぶ。棺箱を実際に墓からだして、棺箱を開けて遺骸を座らせ、酒を口に含ませ、「いっしょに遊びましょう」と声をかけて、その周りを一四、五名の若者が歌い踊って遊んだ。八時、九時ごろから一一時、一二時まで遊んだ。これは過去の行事とはなったが、経験者は生存している。沖縄では、これに結びつくモアシビが戦後一時期まで盛んだった。われわれの時分からなくなったが、夜、夕飯がすんでから野原に出て三味線持って遊ぶことをモアシビといい、そういうモアシビ仲間がこのような別れの遊びをやったのである。

墓参りの問題に付け加えておくこととして、イナグヌハカメーという儀礼がある。イナグヌハカメーは女性だけの墓参りのことである。普通は男女平等で墓参りしているので、これは少し珍しい墓参りの儀式である。那覇や浦添では見られるが、他の地域ではあまり見られない。死んでから四九日の間に七回のナンカスーコー（焼香）があるが、この四九日うちに女性だけによる墓参りがある。これは地域によって三回もやれば、一回だけというのもあって、戦

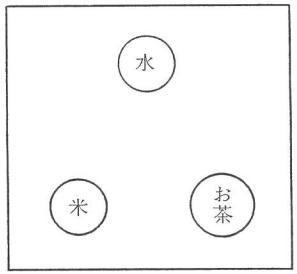
前まではあったが、今はこれも廃れている。そのかわり女性はナンカスーコーは行かない。この女性だけの墓参りのときは必ずミクィ（三声）、要するに三回だけワッと泣く儀礼があった。男性の場合は、墓参りのときのそういう儀礼はべつにないが、女性の場合にはある。なにか古い魂よばいの名残があるような気がする。

ナンカスーコーがすんだあとは、ヒヤッカニチ（百日目）とニンチスーコー（年忌焼香）がある。ニンチスーコーは、イヌイ（一年忌）、ンチュヌイヌイ（三年忌）、シチニンチ（七年忌）、ジューサンニンチ（十三年忌）、ニジューグニンチ（二十五年忌）、サンジューサンニンチ（三十三年忌）の六回行なわれる。

ウチカビ（打紙、紙銭）は十三年忌までは、各々三枚ずつで、二十五年忌には二五枚、三十三年忌には三三枚使う。とくに三十三年忌はウワイスーコー（終わり焼香）といわれ、祖霊は「ウティンカイアガイミセーン」（天に上る）といわれ、盛大に祝う。供え物には、赤飯や花ボウル、ハク菓子、天ぷら、肉など、ティンジカビ（仏の絵の赤紙）やナナヌハシヌカビを仏壇に飾る。座喜味ではティンジカミは火の神の前で燃やしたが、ヒヤクショウ（百姓）はやらず、サムレー（士族）系統が行なった。

イチミ（生者）とシニミ（死霊）を分かすマブイワカシの儀式がある。期日はシンジュウクニチ（四十九日）の焼香がすんだ夕方に行なう地方が多いが、なかにはナーチャミー、三日めなどに行なう地方もある。これには、死者の家族と臨終に立ち会った身内の人々が参加する。司祭者は親戚のなかでそういう祈願事になれたカッティ（勝手）を頼んで行なうのが多いが、なかには専門のユタ（巫女）を頼んでする場合もある。

読谷村長浜では、次頁の図のように水とハナグミ（花米）、ウチャトウ（お茶湯）を仏壇のある部屋の中央に置き、「イチミトゥ、グソーヤワカリーグトゥ、マブヤーヤ、ナァ、ウーティアックナヨー」（生霊と死霊とは分かれますので、魂はもう追いまわして歩きますな）という呪言をいう。このとき、準備してあった水を皆の額へつける。座喜味ではご



飯、汁、水を供え、皆でご飯を三箸ずつ食べる。その後、水をつけて額と手を三回撫でる。比謝では死者の分の食事には箸を添えない。その理由は、死者の霊は箸がないといって去っていくからだという。渡慶次では、おにぎりと豆腐を外に向けて供え、おにぎり一個を外に向かって投げる。供えた水で額に三回つける。儀間では、餅、豆腐、水を供え、ススキ三本でサンをつくり、これでヤナムンを払い、外に投げる。そして水を三回額につける。それでアカリトーン（分かれる）。唱え方は「グソーヤグソーヌナリトッティ、タチャガイヌバガイサングトゥ、マタ、シティナサハゴーササラングトゥニ、ウミティッチアカリティトゥラショー、ウートートゥ」（後生は後生の生き方をして、家族の前に現れないで、また嫌われて見捨てられないように、思い切って別れてくださいね。ウートートゥ）

四、後生の世界

1　風葬に伴う洗骨儀礼

ここで墓制と洗骨の問題について述べてみる。

沖縄本島を中心に、三〇～三五年前から火葬が普及した。しかし、たとえば久高島とか津堅島、そういう離島および先島では、まだ火葬はあまり普及していない。従来どおりの風葬、いわゆる洗骨が行なわれている。

洗骨の呼称は多い。代表的な呼称としてはシンクチ（洗骨）がある。それからギレーという言葉が、沖縄本島の南部から中部にかけてある。これは古い言葉で「繕う」という意味がある。それからチェラクナスン（美しくする）と

洗骨の場面（北谷町）
棺箱から遺骨を取り出して洗骨している（玉城順彦氏提供）。

家型厨子（本部町）
村墓の内部。写真は石厨子である。

厨子甕（渡名喜村）
トゥムダラシと称する共同墓。洗骨された遺骨は、写真のように厨子甕に納めて岩陰に安置する。

いう言葉、それと北部の本部半島付近ではトイウチ（取り置き）あるいはタマクチヒラファイン（骨を拾う）というような言葉も聞かれる。

墓はだいたい共同墓で、家族の共同墓、あるいは一門親族の共同墓、村の共同墓などいろいろあって、そういう血縁的共同墓、あるいは地縁的共同墓になっている。新たに死者がでた場合に洗骨儀礼が行われる。長らく死者がでていない場合は、洗骨の日時をムンシリやユタなどの家に行って選定してもらう場合もある。そういうときには、タナバタ（七月七日）に行なう地方もある。タナバタはヒーナシといって、いつでもやっていいという日である。

湯灌の水は禁忌が伴うが、洗骨の場合はさほど禁忌はない。水や海水でちゃんとジャブジャブ洗う地方もあれば、単に布切れで拭き清める地方もあるし、丁寧なところは泡盛で拭き清めるところもある。

そのなかで、宮古の多良間島とか、あるいは狩俣・島尻という地方では洗骨儀礼に該当しないような、単に骨を移す儀礼がある。墓のなかの骨がいっぱいになったとき、少し奥に移す儀礼である。これは骨を全く大事にしないということではなくて、やはり沖縄本島と同じように骨は大事にする。しかし、骨がいっぱいになった頃に少し奥に移す程度であるから、沖縄本島で顕著な洗骨儀礼とはちょっと質が違う。

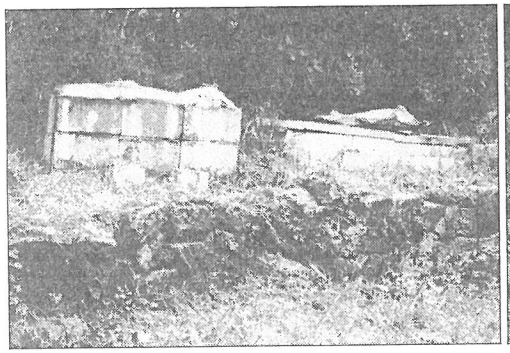
洗い終えた骨はジーシガーミ（厨子甕）に納める。夫婦の場合はいっしょに納める。一方が亡くなればとりあえず中規模の厨子甕に入れておいて、あとで大きいものに移しかえる。これはミートゥンダーカーミヌチビティーチ（夫婦は甕の尻一つ）という諺にもなっており、偕老同穴の意である。ところが渡名喜島では、ちょうど中国と同じように一つの甕に一体である。このことから、沖縄の夫婦合葬は、そう古い習俗ではないと考えられる。こうして洗われた骨は、三十三年忌がすんでしまうと、墓の後ろのほうにあるチブ（凹み）へ合葬してしまう。こぼしてしまって合葬する方法もあるし、あるいは何百年と同じ厨子甕に入っている場合もある。

2　忌みごもり期間の風習

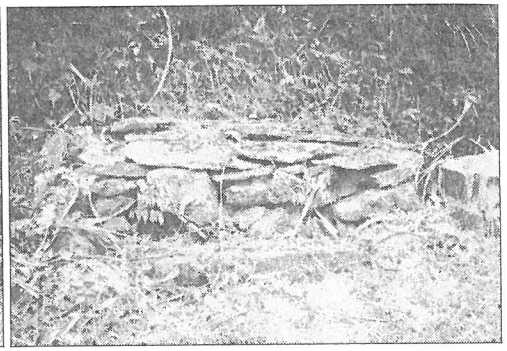
忌みごもりの期間は、家族や近親の者は葬式の日から四十九日までである。金物のかんざしを竹製に切り替える。そして髭もそらず、男の人はクバガサをかぶって他の人と顔を合わさない。ミーサ（新仏）の忌み期間は以前は二、三年までであった。現在は一年以内というのが多い。死者がでると仏壇にある位牌を後ろ向きにする。また、戸主が亡くなった場合、牛、馬を売り替える風習がある。これはチナゲーイ（綱替え）と称している。売り替えないと、まもなく死ぬと考えられているからである。麦や大豆などの種子類を持ちだす風習もある。そうしないと種子が発芽しないといわれる。それから自分の畑へ青い竹などを挿す風習がある。これは死者が畑をまわってきて踏み荒らす、作物を枯らしてしまうからだという。しかし久高島では、これまたおもしろい事例として、六〇、七〇歳の男の老人が死んだ場合のみ青竹を立てる風習がある。女や若い者が死んだ場合は立てない。なぜかというと、こういう老人は働けないから、自分の畑はここだというしるしだけでも立ててやるのだという。八重山では畑を与えるのをバギブン（分け前）というが、先に述べたように、死者のため畑をつくってあげるのと共通した問題だと考える。

それから火の神の神体である三箇石を飾って火の神として祀る習慣があるが、その石を死者がでると更新する。それも捨てる場所は決まっているのが普通である。そしてしばらくして新たに石を拾ってきて、火の神をつくりかえる習慣のある地方もかなり多い。以上ざっとあげたが、死の忌みに関する風習はたくさんある。

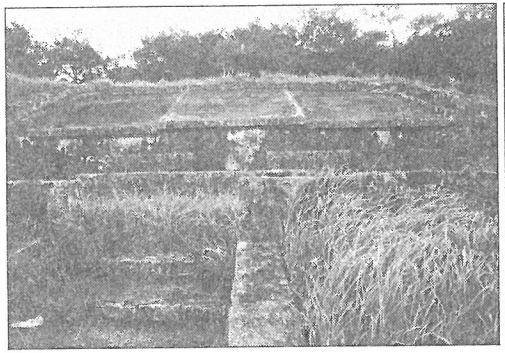
死者を弔う方法の中で、とくに幼児が死んだ場合と、ヤナジニ（異常な死に方）をした者に対しては、一般葬法とは異なった特殊な葬法がとられる。幼児葬法は地域によって年齢のばらつきがあるが、普通は七歳以下である。この場合には葬式を大げさにしない。たとえばガンにも乗せない。ヤナジニというのは、溺死とか伝染病などで亡くなった人をいい、葬式はたいへん質素である。墓も押し込めてしまって墓口もつくらない。そして葬式もその日一日のう



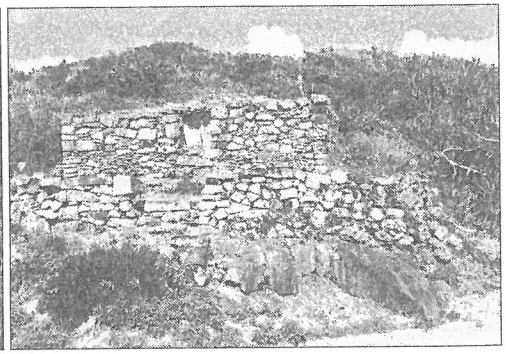
箱形墓(渡嘉敷村)
ブロックを積み上げて造ったユシリ(仮墓)である。



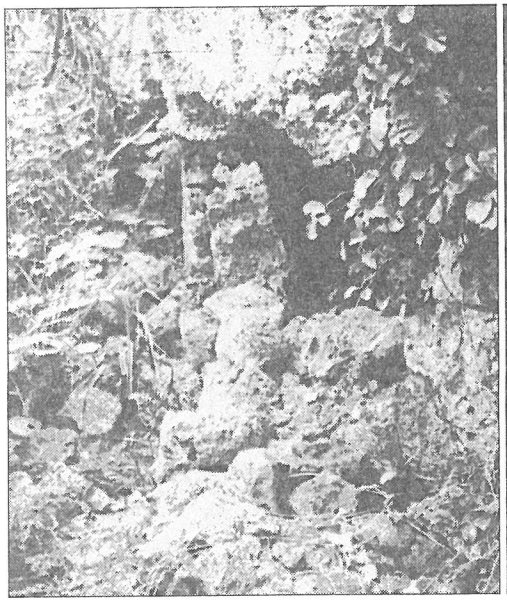
石積墓(国頭村楚洲)
テーブルサンゴ石を用いて造ってある。



平葺き墓(糸満市)

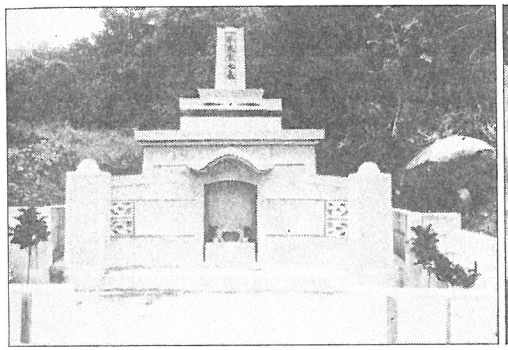


石積墓(久米島島尻)　共同墓である。

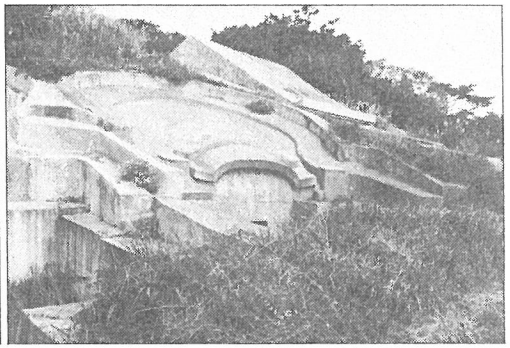


洞穴囲込墓(知念村久高島)
ズリ墓(村墓)。現在は神墓化して使用されていない。

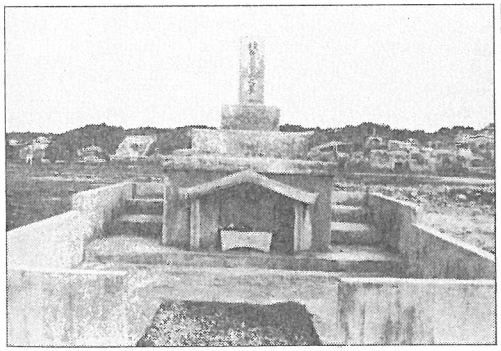
風葬(知念村久高島)



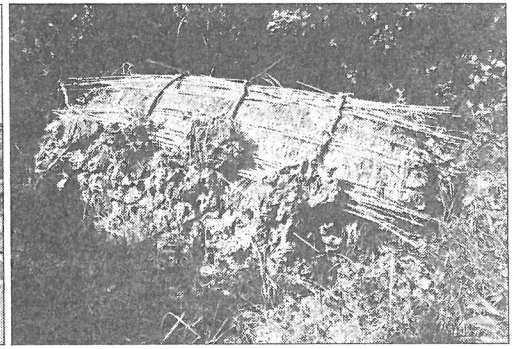
塔式墓(八重山石垣市)　家族墓である。



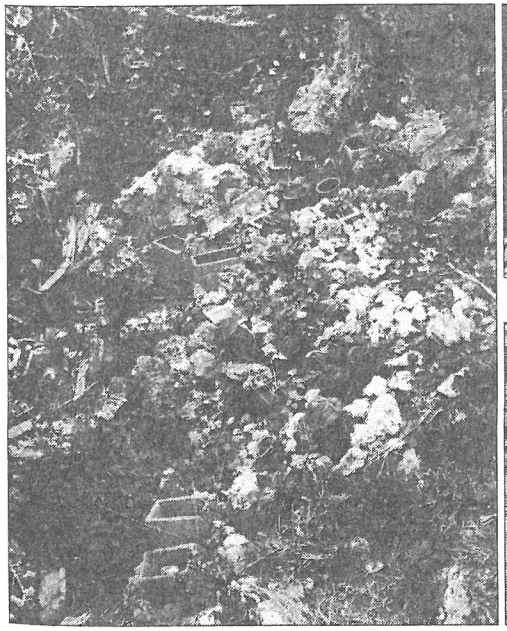
亀甲墓(手前)とヒラフチ墓(後方)



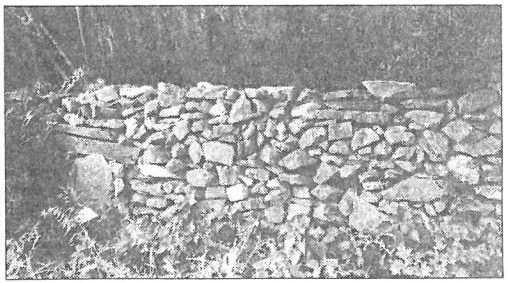
塔式墓(与那国島)



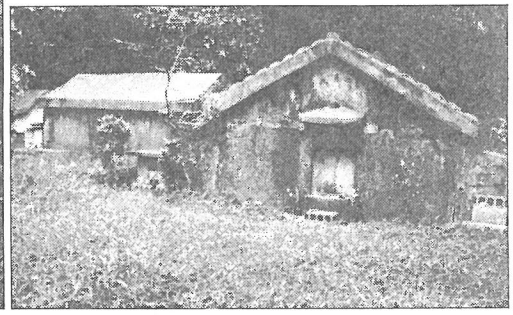
ヌーヤー墓(八重山新城島)　現在はなく、幻の墓となった。



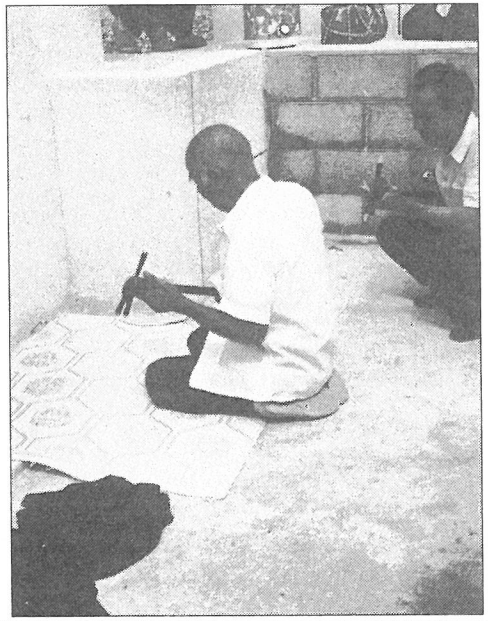
崖葬(知念村久高島)



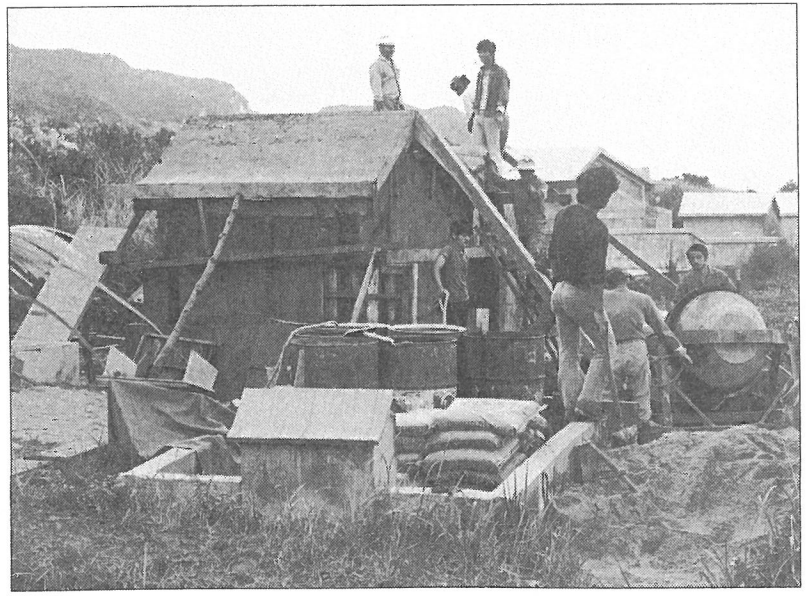
岩穴囲込墓(渡名喜島)　構成員の多い模合墓である。



模合墓(名護市汀間)
知人が寄り合って使用する。破風墓で、手前がシルヒラシ墓で左側は納骨墓。



墓の新築祝い（読谷村）
三味線でカリーを付けているところ。



墓の建造（読谷村）

ちにすませてしまう。

死者が一年以内に続いてでたときも、少し変わった葬式を行なう。身内にそういう事態が起こった場合、二度あることは三度あるということを恐れて、二度めの葬式のときに三度めの模擬葬式をする。この場合に、小鳥を殺して小箱に納めて三回めの模擬葬式をする。身代わりとしての小鳥が人形の場合もある。あるいは卵のときもあるが、これらの身代わりをヌクーという。この「ヌクー」の意味はよくわからないが、「ヌクーヨー」と三声泣いて模擬葬式をする。

3　墓の形式と建築儀礼

沖縄では風葬であったために、墓所はおもにそれに適した外葬地、自然の岩場であった。それがだんだん人口が増えて人工的な墓をつくらなければいけないようになって、丘を掘り込んだ横穴式の墓が出現する。いわゆる掘込型で、いろいろのタイプがある。中国の福建あたりから伝わったといわれている亀の形をした亀甲墓、タマウドゥン（玉陵）などに代表される家の形をした破風墓などの横穴式の墓がある。それから平地式の古い墓としては、石で簡単に積み上げて上をカヤでふいた畑小屋形式のヌーヤー墓がある。これは、最近まで八重山にはあった。それから石積みの墓、ミヤーカ墓とも呼ばれている。このようにだいたい横穴式と平地式に分類できる。火葬になった現在では、そう大規模な墓室、墓堂を形成する必要もなくなり、三坪ないし四坪ぐらいのコンクリート製の小屋風の家形墓がほとんどである。

墓の建築儀礼は、亀甲墓の出現とともに行なわれるようになったと考えられている。つまり、亀甲墓だと建造に半年はかかる。戦前までは自分の住み家よりも早く墓をつくった。家を早くつくると笑われたくらいである。それほど

墓をとても大事にしていた。このように、たいへんな月日と思いをこめてつくった墓だから、建築儀礼も込み入ったものであった。墓の落成式前に七回も八回も儀礼を行なう。とくに落成式のときには、その墓の中に入って三味線（サンシン）を弾き、カリー（嘉例）をつけて、その家が栄えることを祈った。そして神にみたてた白髪の老人をしたてて、その老人を迎えたりする儀礼もある。供え物も、鶏をまるごと供えたり、豚の頭、エビとかカニとか、筆、墨、そういういろいろな供え物があってたいへん盛大な儀式が行なわれた。墓の年忌も人の年忌と同じように、墓を作った当たり年に三十三年まで行なう。これは現在でも続いている。

●環中国海の民俗と文化　第三巻

祖先祭祀

一九八九年一月三十一日初版第一刷発行

編　者――渡邊欣雄
定　価――五九〇〇円
発行所――株式会社凱風社
東京都文京区後楽二丁目二十二番十二号
〒112　☎〇三-八一五-七六三三
FAX☎〇三-八一五-九五一〇
郵便振替　東京五-八八七一五

本文印刷■平河工業社　カバー・表紙印刷■東光印刷所　用紙■中庄
製本■東和製本　組版■猪瀬印刷＋ローヤル企画　発行所代表■小木章男
©1989 Printed in Japan
3339-890148-1136